

〈最終講義にかえて〉

## 応用言語学としての外国語教育学

—回顧と展望—

伊藤 克敏

はじめに

1960～70年頃までの外国語教育と応用言語学との関係と現在のそれとはかなり変化している。その原因は何であろうか。1970年代までは言語学と外国語教育の関係が極めて密であった。その主な理由として、1950年頃までは今世紀の初頭から言語学界を席卷した構造記述言語学の原理や方法が外国語教育の教材作成や教授法とかなりと直接的に結びついていた(Fries, 1945), ということがあり、第2次世界大戦中、言語学者が外国語教育に携わっていた。1960年代からは変形生成文法の外国語教育への応用が盛んになっていった(伊藤, 1976)。

しかし、1970年頃からは言語学は隣接科学との関係が進み、言語学はいわば拡散時代に入った。従って、言語学と外国語教育との関係はそれほど単純なものではなくなって行った。また、第二言語習得理論や教授法においても、発達心理言語学や社会言語学、そして最近では語用論などとの関わりも多くなり多様化して来た。「応用言語学としての外国語教育」のあり方が質的にどのように変化して行ったのかを考察してみたい。

### 1. 言語学の応用性

1960年代までは外国語教育は発音や文法を教えることが中心であった。従って、言語の構造記述を研究の中心にしていた構造記述言語学や変形生成文法の研究方法が教材や教授法に直接的な影響を及ぼし、外国語教育と言語学との関わりは直接的であった。

しかし、国際化が進み、コミュニケーションとしての語学力が重視されるようになり、1970年以降、文法能力を含む伝達能力 (communicative

competence) の養成が注目されるようになった (Canale & Swain, 1980)。また、最近の第 2 言語習得論における誤り分析 (error analysis) から生まれた「中間言語論」(interlanguage) は発達心理言語学 (Developmental Psycholinguistics) とも深い関わりがあり、ことばの社会的機能と関係が深い Communicative Approach は社会言語学 (sociolinguistics) や異文化間語用論 (Cross-cultural Pragmatics) と関連性が濃くなってきた。

1960 年頃までの言語構造研究中心の言語学を「狭義の言語学」(microlinguistic)、心理言語学や社会言語学のように関連諸科学との関わりが深い言語学を「広義の言語学」(macrolinguistics) と定義すると、最近の外国語教育の研究は広義の言語学との関わりがより深くなりつつあるといえよう。

では、言語教育の外国語教育への応用はどのような形でなされるべきであろうか。応用言語学の大御所であるコーダ (P. Corder) の言を引いてみよう。

“Applied Linguistics is a set of related activities and techniques mediating between the various theoretical accounts of human language on the one hand and the practical activities of language teaching on the other. The relation between linguistic theory and classroom activities is thus an indirect one. It is made up of a number of processes and procedures, each one necessary for the solution of one of the component parts of the problem of what, when and how to teach—selection, organization and presentation.” (Allen & Corder eds., 1975, 2-3) (下線は筆者による)

応用言語学は言語の理論的研究と言語教授という実際的な活動とを関連づけるもので、その関係は間接的、外国語教育の教材の選択、時期、方法に関わるものである、としている。

## 2. わが国における「言語学の外国語教育への応用」の軌跡

1930 年代から 1950 年代頃までは構造記述言語学隆盛の時代で、米国では第 2 次世界大戦中言語学者が直接外国語教育に携わることが多く、その一人であったブルームフィールド (L. Bloomfield) は名著 *Language* (1933) の第 23 章に外国語教育に関する所感を述べている。外国語は「たゆまぬ

繰り返し」(constant repetition) によってのみ効果的に習得できるとする言語習得論を提唱し、それをフリーズ (C. C. Fries) が踏襲し、発展させ、口頭教授法 (Oral Approach) を編み出し、一世を風靡した。フリーズ自身 1956 年から 1959 年まで数回にわたって来日し、その教授法の普及に努めた。折りしも、実業界から「役に立つ英語」への要望が強くなり、オーラルアプローチはその特効薬として歓迎された。言語は「対立型」(contrastive patterns) から成る体系 (system) であるというのが基底を成す言語観で、それを学習者の行動習慣にするのが刺激 (stimulus) と反応 (response) の原理に基づいた行動主義的心理学であり、それに裏付けられたオーラルアプローチの「文型練習」(pattern practice) であるとした (Fries, 1945)。

1960 年代の初頭までは行動主義的言語習得論の影響が強かったのであるが、1963 年に来日したヒル (A. A. Hill) が行った講演 “Recent development and problems in the teaching of English” (ELEC Publications. Vol. VI. 研究社, 1963 に収録) において、変形生成理論の英語教育への応用の可能性を示唆している。1960 年頃から変形生成文法の英語教育への応用研究が盛んになった。(伊藤, 1965; 鳥居ほか, 1969)。

1970 年代に入って注目すべき展開は、従来、英語という言語体系そのものの習得に注意が向けられていたのであるが、社会言語学の発展に伴い、言語能力よりは社会的場面でのことばの使用能力としての「伝達能力」(communicative competence) の養成に注意が向けられるようになった。ハイムズ (Hymes, 1973) のことばを借りれば、その能力とは “Who can say what, in what way, where and when, by what means and to whom” という内容を備えたものといえよう。

社会言語学と同時に心理言語学 (psycholinguistics) の応用にも目が向けられた。特に、「発達心理言語学」の研究成果の応用が盛んで、母語習得の原理を外国語習得に応用しようとする傾向が顕著であった (比嘉, 1972)。母語習得と変形生成文法の応用から編み出された「誤り分析」(Error Analysis) は注目を浴びた。近年の母語習得過程の研究から、幼児は周囲のことばを単にコンピュータにインプットするようにことばの規則を 1 つづつ覚えこんで行くのではなく、周囲のことばを「再構造化」(restructuring) し、原構造から徐々に、より完全な構造に構築 (construct) して行くとする「創造的構築主義」(creative constructionism) が主流になっていった。言語

の習得過程において、周囲のモデルにはない文構造が創り出される。例えば、Where does the wheel go? という文の米国の児童による習得は (1) のようなプロセスを取ることが観察された。

- (1) a. Where the wheel goes?
  - b. Where the wheel do go?
  - c. Where does the wheel goes?
  - d. Where does the wheel go?
- (Menyuk, 1969, p. 73)

従来、母語習得と外国語習得の相違点が強調されて来たが、発達心理言語学の研究成果で両者の間にはかなりの類似点のあることが明らかにされた。つまり、文を創り出すための規則の運用における心理的過程と負担の間にはかなりの共通点があり、習得者は初段階において心理的負担を軽減するために、意味伝達に関係の少ない規則の習得を遅延し、いわゆる「文法の単純化」(simplification of grammar) を起こすことになり、ある種の規則の不適用が生じる。それが不完全な文(中間言語)になって表出するわけである。(2)-(5)の文は米国の児童の未発達文であるが、わが国における英語学習者にもある段階でこれらに類似した不完全文が見られるのではなかろうか。

- (2) How you take it out?
- (3) What you are writing?
- (4) What does this does?
- (5) I don't want some supper.

1970年以後「誤り分析」についての研究が盛んになった(中山隆吉, 1976; J. Richards, 1974; 伊藤, 1978, 1986)。

発達心理言語学の応用として注目されるのが Winits (1981) などによって提唱された「理解優先指導法」(comprehension approach) であろう。幼児が母親のことばに耳を傾け、1歳半頃になってことばが出て来る。そういった習得のプロセスを第2言語教育にも応用しようという考え方が基本にある。母親が幼児にことば掛けをするように、教師は学習者に十分なこと

ば掛けをすることによって、無理なく自然にことばを習得していくようにする。クラシェン (Krashen, 1985) は学習者にインプットを与えることによって無理なく外国語を習得する「インプット仮説」(Input hypothesis) を提唱し、注目された。クラシェン (1983) では主として oral input の重要性を説いていたのであるが、最近では、識字能力 (literacy) をつけるための reading input の大切さを強調している (Krashen, 1993, 1997)。「理解優先法」は Silent Way, Suggestopedia, Community Language Learning, Cooperative Language learning などを派生した (水野, 1995)。

1980 年代に入ってハワイ大のロング (M. Long) は “Input is necessary but not sufficient” (Temple 大での公開講演での発言) といった考え方から、インプットを注入するだけでは十分ではなく、文法意識 (grammatical awareness) を高め、文法形式に学習者の注意を集中すること (form focused) の重要性を主張し、現在もその研究が続いている。

従来の外国語教育では、主として発音や文法を中心にした語学能力の養成に力点が置かれてきた。しかし、中学や高校でオーラルコミュニケーションが重視され、社会的場面に適切な (appropriate) ことばの運用力の重要性が強調されるようになり、いかに異文化の人達と上手にコミュニケーションするか、といった問題が注目されるようになって来た。

こういった語学教育の傾向に理論的根拠を与えたのが英国で盛んになった機能主義的言語学 (functional linguistics) やカナダを中心に発達した二言語教育 (bilingual education), 更に、ハワイ大のキャスパー (G. Kasper) を中心に研究が進行している第二言語語用論 (Second Language Pragmatics) である。社会文化的場面に適切なことばの使い方の研究を目指す語用論は L1 と L2 の語用を比較して相違点と共通点を明らかにし、それに基づいて教材や教え方を工夫することが必要になり、異文化間語用論 (cross-cultural pragmatics) が注目されるようになった (Rose & Kasper, 2001; 伊藤, 1990, 1999)。

伊藤 (2003) で触れたように、最近、脳の機能と言語習得の関係の研究が応用神経言語学 (Applied Neurolinguistics) として脚光を浴びている (Danesi, 2003)。また左右脳の機能差と第二言語習得の研究も注目されている (Wray, 2002)。かくして、言語学と第二言語 (外国語) 教育の関係は多岐化しており、応用言語学としての外国語教育研究は今後益々重要になるものと思われる (Mitchell & Myles, 2004)。

(本稿は語学教師として筆者が取り組んできた「応用言語学としての外国語教育学」の軌跡の一端を記したものである。本言語研究センターにおける言語学と外国語教育学の研究が一層充実せんことを祈って止まない。)

#### 参考文献

- Allen, P. B. & S. P. Corder eds. 1975. *Papers in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Canale, M. & M. Swain. 1980. "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing" *Applied Linguistics* 1 (1): 1-47.
- Danesi, M. 2003. *Second Language Teaching: A View from the Right Side of the Brain*. London: Kluwer Academic Publishers.
- Fries, C. C. 1945. *Teaching and learning English as a foreign language*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- 比嘉正範. 1972. 「言語心理学と外国語教育」『英語教育』1972年3月号 東京：大修館書店.
- Hymes, D. 1973. "Competence and performance in linguistic theory" In P. Huxley & E. Ingram eds. *Language Acquisition: Models and Methods*. London: Academic Press.
- 伊藤克敏. 1965. 「変形理論の英文理解への応用」『英語教育』1965年3月号 東京：大修館書店.
- . 1976. 「変形文法と英語教育」中島文雄監修『英語教育と英語学』東京：大修館書店.
- . 1978. 「誤りを生かした指導」『ことばと教育』東京：三省堂.
- . 1986. 「誤答分析 (Error Analysis) 研究の外国語教育への示唆」『語学研究』(神奈川大学外国語研究センター) 第9号.
- . 1990. 「日米伝達方略の比較とコミュニケーション能力の養成」『言語研究』(神奈川大学言語研究センター) No. 13.
- . 1999. 「異文化間語用論と外国語教育」『言語研究と英語教育』(中部応用言語学研究会) 第5号.
- . 2003. 「脳の発達・機能と第2言語(外国語)習得」『言語研究』(神奈川大学言語研究センター) 第23号.
- Krashen, S. 1993. *The Power of Reading: Insights from the Research*. Englewood, Colorado: Libraries Unlimited, Inc. (長倉美恵子ほか訳『読書のパワー』東京：金の星社).
- . 1997. *Foreign Language Education: The Easy Way*. Culver City, CA: Language

Education Associates.

Krashen, S. & Terrell. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Hemel Hemstead, UK: Prentice Hall International (藤森和子訳『ナチュラルアプローチのすすめ』東京：大修館書店).

Menyuk, P. 1969. *Sentences Children Use*. Cambridge, MA: MIT Press (伊藤克敏訳『言語習得の原型—生成文法的アプローチ』広島：文化評論出版).

Mitchell, R. & F. Myles. 2004. *Second Language Learning Theories: Second Edition*. London: Arnold.

水野光晴. 1995. 『外国語習得その学び方 100 の質問』東京：研究社出版.

中山隆吉. 1976. 「英語教育の実践と error analysis」大学英語教育学会『紀要』第7号.

Rose, K. & G. Kasper. 2001. *Pragmatics in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

鳥居次好ほか. 1969. 『変形文法の英語教育への応用』東京：明治図書.

Winits, H. 1981. *The Comprehension Approach to Foreign Language Instruction*. Rowley, Mass.: Newbury House.

Wray, A. 2002. *Formulaic Language and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.